

有田・小田部 33

— 有田遺跡群第189次の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 649 集

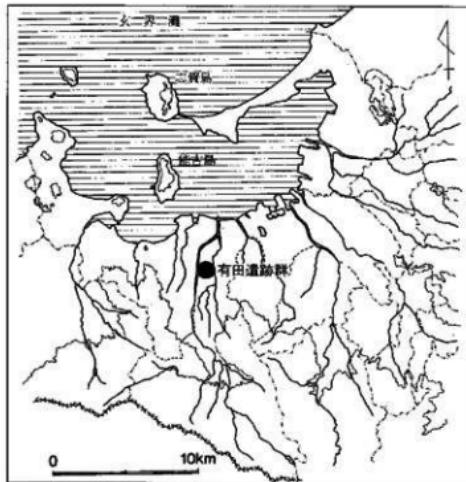
2000

福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE
有田・小田部 33

— 有田遺跡群第189次の調査 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 649 集



遺跡略号 ART-189

遺跡調査番号 9803

2000

福岡市教育委員会



有田遺跡群189次全景



郡庁建物

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が先史時代より絶え間無く続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物が地中に残され、調査が進むなか明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査では奈良時代に早良郡を治めていた役所「郡衙」の中心施設ある「郡庁」という極めて重要な遺構が発見されました。今までにも「正倉」とよばれる当時の税を収蔵していた倉庫群や饗應施設といわれる「館」の跡と考えられる大型建物が見つかっていましたが、今回その中心となって政務を執っていた施設である「郡庁」が判明したことによって、郡衙の全容を知るのに大きな進展をみるとともに、古代律令制度の推移を知る上で貴重な資料を得る事ができました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後に調査に際し御協力いただいた関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書は福岡市有田2丁目14番1外において福岡市教育委員会が1998年度に実施した調査報告書である。
2. 調査は荒牧が担当し、写真撮影、遺構図面類等の資料作成にあたっては担当者のほか、大塚、三谷朗子、辻 節子、栗木和子、山田ヤス子が行った。
3. 遺物整理は品川伊津子、安川三千代、黨 早苗が行い、実測、浄書は荒牧のほか屋山が行った。
4. 本文は荒牧が執筆した。
5. 本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書掲載の遺構図方位は国土座標北で、真北より $0^{\circ} 19'$ 西偏する。
2. 遺物実測図の番号は土器と石器を別途に通し番号を付した。

調査名	有田遺跡群第189次	開発面積	1,721 m ²
遺跡略号	ART 189	調査面積	1,290 m ²
調査番号	9803	調査期間	980402～980731
調査地番籍	早良区有田2丁目14番1外		

目 次

I はじめに				
1 調査に至る経過		SB04	15	
2 調査の経過		SD05	16	
3 調査体制		SB05	24	
II 位置と環境	1	SB06	24	
III 調査の記録		SB07	24	
1 弥生時代の遺構		SB08	24	
SK296	5	SB09	27	
SU403	6	SD01	27	
SU328	6	SD252、253	27	
SU800	11			
2 古代の遺構		4 その他の遺構		
SB01	15	SX382	29	
SB02	15	SK183	29	
SA03	15	5 その他の出土遺物	31	
		6 調査区南半部	31	
		SD399	31	
		SD391	31	
		IVまとめ	32	



図1 有田遺跡群 189次調査地点 (1/50,000)

I はじめに

1 調査に至る経過

平成9年12月3日に坂口杏原氏より開発面積1721m²、鉄筋コンクリート造3階建ての共同住宅建設計画のもと、市行政へ開発事前審査願が提出された。これを受け、開発担当部局との間で指導、調整がとり行われる中、教育委員会埋蔵文化財課においても、開発地が有田遺跡群に含まれるため、審査が進められた。当課では開発計画の設計、位置などから試掘が必要と判断し、翌年2月3日に試掘を実施して遺構を確認した。以後、施工の坂口氏とともに工事施工業者である上村建設株式会社との間で協議を重ね、平成10年4月より調査を実施する運びとなった。

2 調査の経過

(調査区の設定)

条件整備が整い、調査は平成10年1月2日より開始した。試掘成果を踏まえた協議では開発地の北端は上部が搅乱を受けた溝状の遺構があるが、開発による遺構の破壊を受けないため発掘調査をせず、境界より数m引けをとることになっていた。また、西側既設道路から建築物までの幅4m、延長22mにおいても家庭菜園と通路が計画されていたが、この範囲も地下の埋蔵文化財に影響を与えないという判断で調査区から外された。これに従い調査区を設定し、バックホーによる表土剥ぎから開始した。

(協議と調査経過)

北半の表土剥ぎには3日間を要したが、この間、直ちに大形の柱穴が配列していることが確認され、それが他の郡衙における調査成果と比較すると郡庁の構造をとっていることが確認できた。また、周辺の調査成果と総合すると、郡衙の構成もかなり明らかになり、その重要性が十分認識できた。そのため、埋蔵文化財課内部で保存措置を含めたその対応について、論議を交わし調査を進行していくこととなった。重ねた論議の中心となったのは郡庁の当否を含めた遺構の性格と構成であった。将来、郡庁の範囲、構造が明らかとなる可能性は高いものの現在の限られた調査範囲から全体を確定するのは困難であり、さらに予想された南門は検出できず削平のため消滅しているものと考えられた。また、遺物量も少なく、郡庁を推測させるような際立ったものが出土しなかったこと、当地周辺が都心に近い住宅地であることなども要因として積極的な保存への働きかけを当課が行うことはなかった。しかし、将来、調査が進行するなかでその重要性が再認識され遺跡保存が行われる可能性を託し、設計変更による遺構の保存を設計・施工業者と協議したが、計画の構造上、削平は避けられないということであった。

こうして、同年7月31日の調査終了とともに開発が行われていった。

3 調査体制

調査は以下の組織体制で臨んだ。

(調査主体) 福岡市教育委員会 (調査統括) 埋蔵文化財課長 柳田 純孝 第1係長 二宮 忠司

(試掘・協議) 文化財主事 松村 道博 係員 嶋山 洋 (事前審査) 事前審査係長 田中 寿夫、

(庶務) 河野 淳子 (調査担当) 荒牧 宏行

II. 位置と環境

位置

有田遺跡群は福岡市の西部を占める早良平野に位置する。早良平野は北方の博多湾に向かって開口し、背後を丘陵に囲まれた扇状地から成る。その広がりは扇端の河口付近で東西7kmに広がり、南北には8kmに及ぶ。そのほぼ中央に位置した有田遺跡群は鳥栖ロームの堆積物からなる独立した洪積台地である。東西最大幅0.7km南北1kmの範囲に谷が入り組んだ八手状の平面形をなす。標高は5~15mを測り、周縁は侵食され断崖の形状を呈した部分が多い。本調査地点は中央部南寄りに占める最高所の標高13mコンターライン内に在る。

周辺遺跡

ここでは、今回の調査の中心となった古代（7~9世紀）にかけての周辺遺跡を概観する。7世紀代になると丘陵部に大型掘立柱建物がみられるようになる。早良平野では西側の生松台遺跡⁽¹⁾で7世紀後半以降の3×6間の大型建物を含む14棟の建物群が検出され、東側の野芥遺跡群第1次⁽²⁾でも3×8間の掘立柱建物をはじめ大型建物が集中する地区がみられる。時期は不明確であるが、同地点に8世紀代の遺物を含む土壙が検出されていることや、円面鏡や刻字のある須恵器环身が出土していることが注目される。この2遺跡は和名抄にいう額田郷、能解郷を遺称する地点に位置している。東部の福岡平野では中村遺跡⁽³⁾で6世紀後半の堅穴住居跡を切った7世紀後半以降の生松台遺跡の最大建物に近い2間以上×6間の掘立柱建物が構築されている。6~7世紀代の注目される遺構に3木の支柱を組み合わせた堅固な柵列に囲まれた倉庫群があるが、本調査地の位置する有田遺跡群や比恵遺跡群8次、13次、18次で検出され、日本書紀にいう「那津宮家」との関連が論及されている。⁽⁴⁾また、那珂23次⁽⁵⁾で検出された3×4間の並び合3棟は6世紀代の集落廻集後に構築され下限が7世紀前半代までに比定された。時期が判断できる希少な資料である。この調査地点を含めた周辺では6世紀末の袖ノ前窯系の瓦をはじめ、月の浦窯系、百濟系単弁瓦の出土がみられ、整然と縦横に配置された溝が注目され遺構の構成と性格の解明が進められている。⁽⁶⁾

8世紀以降の官衙の要素を含む遺跡として、早良平野の下山門敷町遺跡⁽⁷⁾、東人部8次調査⁽⁸⁾があげられる。ここでは大型建物が整然と配置され、後者では大型の側柱建物と総柱建物を検出し郷倉の可能性も含めその性格が留意される。さらに両遺跡では鉄滓も多く出土し、都地5次調査⁽⁹⁾では良好な製鐵遺構とともに「大殿」と墨書きされた8世紀代の須恵器、銅鏡、瓦が出土している。最近、早良郡からは北西に離れた海岸近くの丘陵地に立地した元岡遺跡では木簡や大規模な製鐵遺構が発見された。筑前においては活発な製鐵業が行われていたことが「延喜式」卷二十四 主計寮上に記して鍛、鐵があげられていることからも窺い知ることができるが、低チタンの砂鉄を得る事ができる早良平野一帯では古墳時代後期から製鐵は盛んに営まれていたと考えられ、多くの後期古墳に鐵滓の供獻を見る。早良郡北伊郷に含まれる柏原遺跡⁽¹⁰⁾では掘立柱建物群や製鐵遺構が検出され、晚唐三彩をはじめ越州窯系青磁、白磁や石帶、鏡、墨書き器など注目される遺物が出土している。なかでも「郷長」、「左原補」と書かれた墨書きは性格を考察する上で重要である。早良平野の奥まった位置にある東人部⁽¹¹⁾9次でも8~12世紀初頭の掘立柱建物、鍛冶炉などの遺構が検出され、晚唐三彩、長沙窯系黄釉磁などの輸入陶磁器の他、円面鏡が出土した。なお、周辺からは石帶も出土している。ここでも、柏原遺跡同様製鐵関連の遺構、遺物がみられることも注意をひく。性格が明らかではないが官衙、郡司などの有力者の居館などの可能性を含め論議されるところである。

最近、瓦の出土から寺院跡の可能性をもつ遺跡も検出されるようになってきた。城ノ原廃寺⁽¹²⁾は

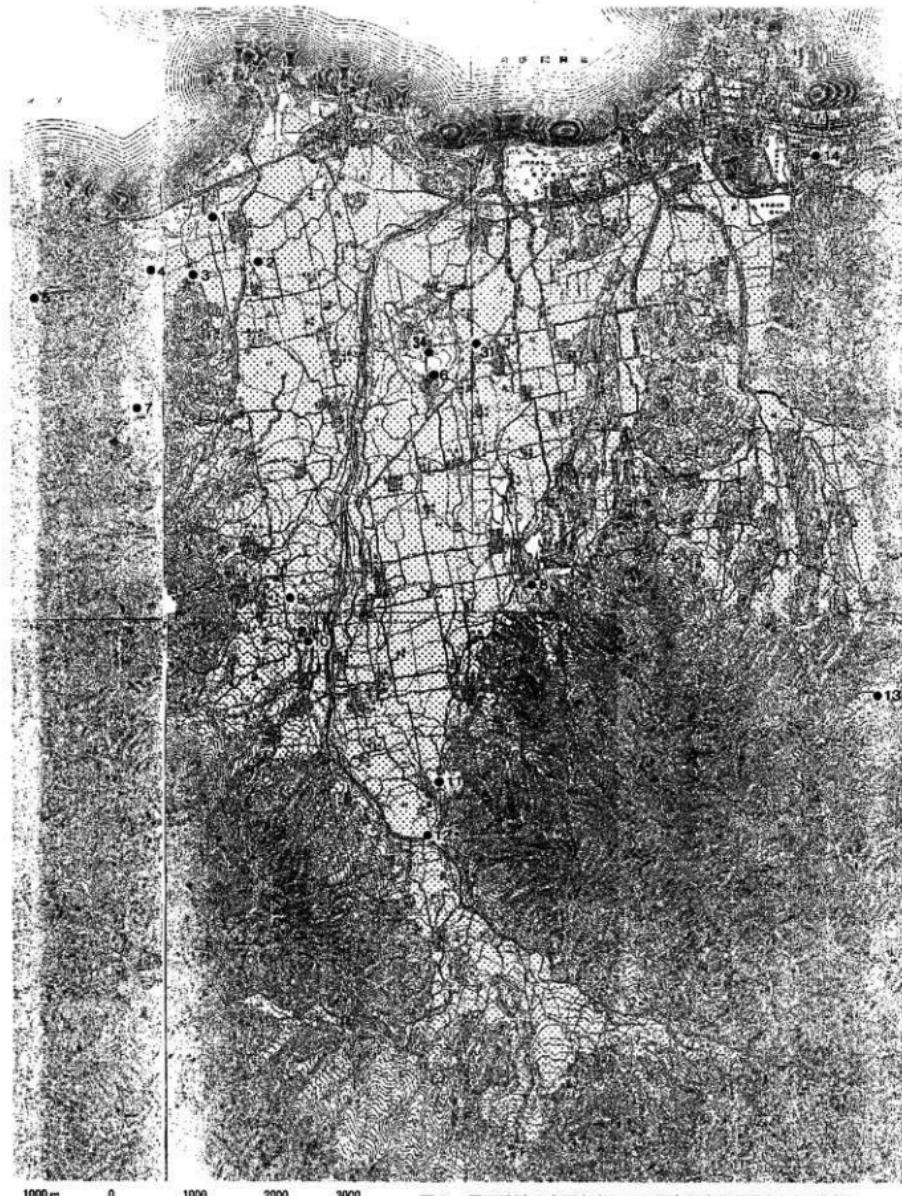
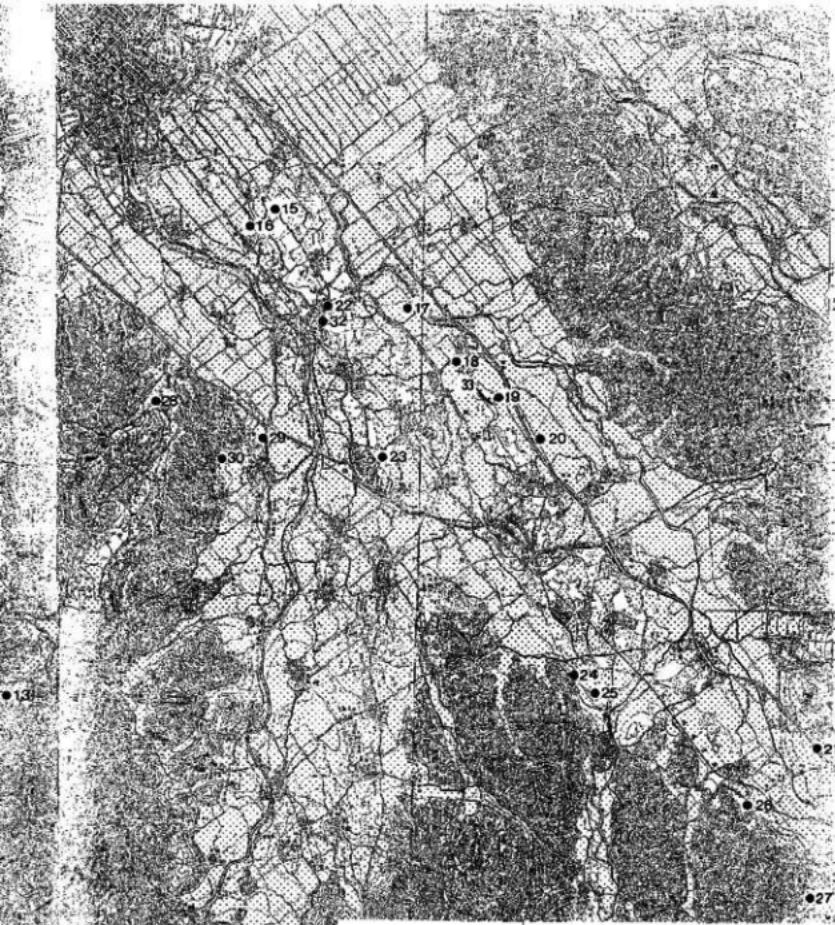


図 2 周辺遺跡分布図(1/60,000 明治 33年測量図をもとに作製)



- | | | |
|------------|-------------|------------|
| 1. 下山門遺跡 | 12. 東入部10次 | 23. 井尻B 3次 |
| 2. 下山門散石遺跡 | 13. 柏原M | 24. 春日公園 |
| 3. 城ノ原庵寺 | 14. 鴻臚館跡 | 25. 水城西門 |
| 4. 斜ヶ浦瓦窯跡 | 15. 比惠7、18次 | 27. 前田遺跡 |
| 5. 鳥崎山墳 | 16. 比惠8次 | 28. 小村遺跡 |
| 6. 有田189次 | 17. 那珂君体3次 | 29. 三宅庵寺 |
| 7. 生塚台 | 18. 板村G 7 d | 30. 大橋E |
| 8. 野芥4次 | 19. 高朝庵寺 | 31. 原10次 |
| 9. 郡地5次 | 20. 井耜川 | 32. 那町23次 |
| 10. 吉武6次 | 21. 水城東門 | 33. 切り通し |
| 11. 東入部4次 | 22. 那珂八幡古墳 | 34. 有田124次 |

從前から知られ瓦や礎石が出土し、奈良時代以降の郡寺と考えられていたが、破壊が著しく実態は不明である。近くには鴻臚館に供給していた斜ヶ浦瓦窯がある。吉武6次⁽¹⁾ 調査では区画溝などの遺構とともに瓦や輸入陶磁器のほか八棱鏡、石帶、「寺」などの墨書き器が出土している。福岡平野では三宅庵寺が礎石の存在等から知られていたところであるが、形態は現在まで不明のままである。周辺の調査⁽²⁾ では7世紀後半～9世紀前半にかけての遺物が出土し、老司式瓦、墨書き土器、黄銅製匙、箸などを含む。高畠庵寺⁽³⁾ は三宅庵寺より創建年代が降り、8世紀中葉に近い時期を比定されている。瓦、墨書き土器の他、木簡、斎事などの木製品が出土している。三宅庵寺を氏寺の性格、高畠庵寺を郡寺とする想定がなされている。近くの井戸B 遺跡群第3次⁽⁴⁾ では溝中より多量の百濟系單弁瓦出土をみたところである。

官道の問題も最近の調査で関連する遺構が検出され、推定ラインも具体的になってきた。原遺跡群第3次⁽⁵⁾ と有田3次⁽⁶⁾ 、124次、169次⁽⁷⁾ では同じ延長上に大溝が検出され、これに沿って官道が推定されている。⁽⁸⁾ 埋没時期は10世紀まで降るが、掘削時期は8世紀代まで遡る可能性がある。更に西側への延長は額田の遺称地である丘陵据都にあたり、「延喜式」からここに駅が存在していた事が知られる。なお、この官道の方向は条理と合致し、基準となったことが推測される。西側の丘陵からの延長は判然としないが、「広石越え」といわれる群集墳の広石古墳群を通して、鋤崎古墳、大塚古墳、若八幡古墳（いずれも今宿平野の首長墓と考えられる前方後円墳）近くから主司司の遺称地である周船寺付近に至るものと思われる。周船寺付近の調査⁽⁹⁾ では関連した遺構は検出されていないが、9世紀代の包含層より越州系青磁、長沙系水注、縁箱陶器、瓦が出土し、また、波状压痕がみられる道路状遺構が検出され、周辺に特別な施設ないし、居館の存在を示唆している。早良平野から出て東側の鴻臚館方面への官道に関連した遺構は未発見であるが、福岡平野では、大宰府から発して水城の切り通しから東門と西門からのルート（山陽道、西海道）を考えられている⁽¹⁰⁾ が、特に、東門からの官道は板付周辺に切り通しがみられれば直線的な延長が想定される。沿線には先の高畠庵寺が位置している。

-
- (1) 「生松台」福岡市埋蔵文化財報告書第226集1990
(2) 「野外遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第675集1998
(3) 「牛村町遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第373集1994
(4) 柳沢一男「福岡市比恵遺跡の官衙的跡跡群」日本歴史第465号1987
(5) 「那珂遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第254集 1991
(6) 吉波正人「那津の山の大型鍾乳洞群について」博多研究会誌第4号1996
(7) 「特發原 緊急発掘された遺跡と遺物」福岡市歴史資料館 1977
(8) 「東八部遺跡群」福岡市埋蔵文化財報告書第381集 1994
(9) 「都地遺跡4」福岡市埋蔵文化財報告書第343集 1995
(10) 「伯原遺跡群Ⅵ」福岡市埋蔵文化財報告書第191集1988
(11) 「入部Ⅵ」福岡市埋蔵文化財報告書465集 1996
(12) 福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書 第六編 昭和6年
(13) 「古武遺跡群Ⅳ」福岡市埋蔵文化財報告書437集 1995 (P-30に櫻妻記載)
(14) 「二宅庵寺」福岡市埋蔵文化財報告書第50集 1979
(15) 「板付周辺遺跡調査報告書」(9) 福岡市埋蔵文化財報告書第98集1983
(16) 「井戸B遺跡2」福岡市埋蔵文化財報告書第411集 1995
(17) 「原遺跡3」福岡市埋蔵文化財報告書第215集 1990
(18) 「有田・小口部8」福岡市埋蔵文化財報告書第155集1987
(19) 「有田・小出部17」福岡市埋蔵文化財報告書第339集1993
(20) 日野 尚志 佐賀大学教育学部論文集第35集 第1号1987
(21) 「徳永遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第242集 1991
(22) 日野尚志「西海道における大路（山陽道）」九州文化史研究紀要第32号 1987
山村哲栄「太宰府周辺の官道」九州考古学第68号1993

III 調査の記録

1 弥生時代の遺構

主な遺構として調査区の中央東端に甕棺3基、中央から南端にかけて貯蔵穴3基が検出された。何れも削平を受け遺存が悪い。その他、黒褐色粘質土の埋土からなるビットが散在して検出されたが、弥生時代のものを含む可能性がある。

1 貯蔵穴

何れも深さ20cm程の遺存であるが、形状から貯蔵穴の可能性が高い。プランは方形のものが1基、円形のほぼ同規模のものが略南北方向に直列して3基検出された。

SK296

主軸方位を甕棺と近似したN-36°Eにとる。北辺近くの最大幅は138cmで、南辺側に狭くなる隅丸方形プランを呈す。主軸長は200cmを測る。深さは20cm、基底面はほぼ平坦で地山は鳥栖ロームの下部と考えられる暗褐色砂質土になっている。西側の長辺の下端は掘りすぎで、土層断面から緩やかに基底部へ移行していたものと考えられる。

出土遺物

弥生前期の土器細片が少量出土したに過ぎず、細かい時期はおさえられない。

1は口縁端部からわずかに下がった位置に棒状工具で楕円形の刻みを施した突帯を付す。2の壺口縁は端部を欠損するが、細りながら外湾している。

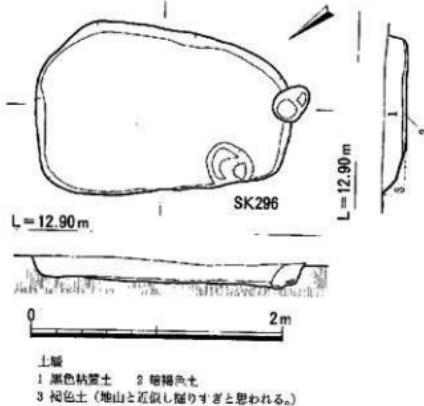


図3 SK296 実測図 (1/40)

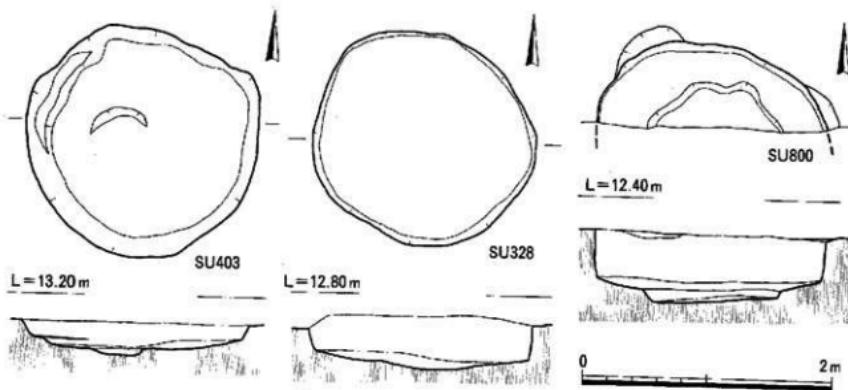


図4 SU403, 328, 800 実測図 (1/40)

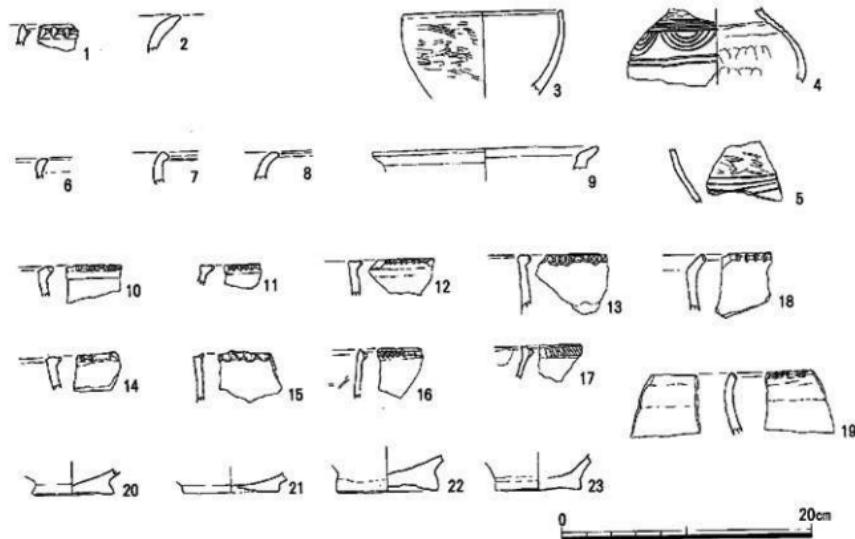


図5 SU 296、403 出土土器実測図 (1/4)

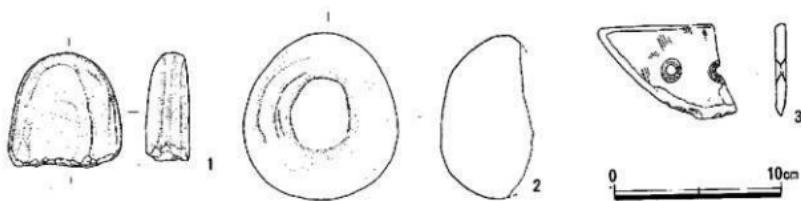


図6 SU 403 出土石器実測図 (1/3)

SU403

調査区の中央部で検出された。径180cmの円形プランを呈す。深さ20cmの遺存で、基底面はほぼ平坦である。

出土遺物

土器 (3~23) 3の鉢は外面ミガキ、内面は口縁端部にナデ、以下ミガキが施されているとみられる。4の沈線内にわずかな赤色顔料が残る。6~9は壺口縁部。16、17は端部から下がった位置に刻目突帯を貼り付け、13、15、17は棒状工具、他はヘラ状工具による刻みである。

石器 (1~3) 1は花崗岩、2は玄武岩製の磨石。3の石包丁は安山岩製。

SU328

調査区中央部の南寄りで検出された。径約180cmの円形プランを呈す。深さは約30~40cmで、基底面の中央部に向かって下がる。埋土は黒褐色粘質土で、検出面より約10cm下げた位置から基底部にかけて多量の遺物が出上した。

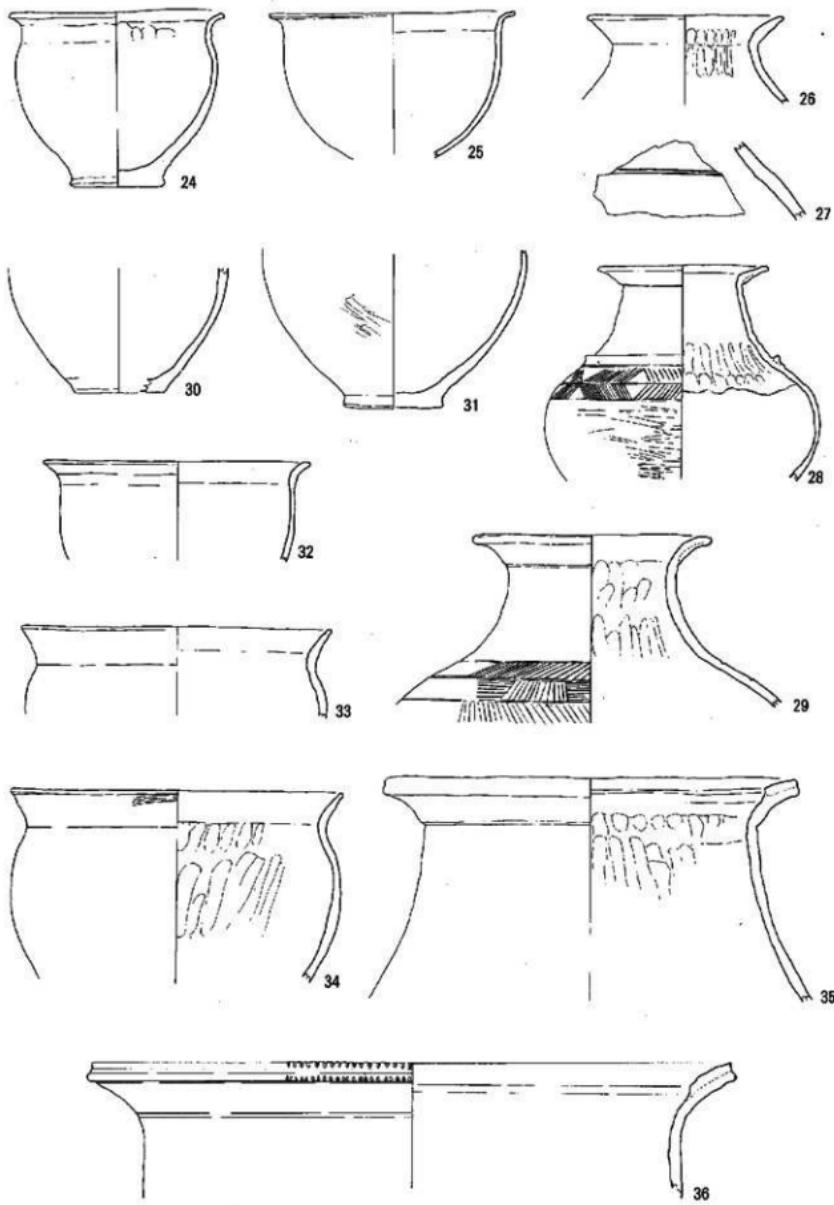


図7 S U328出土土器実測図1 (1/3)

0 20cm

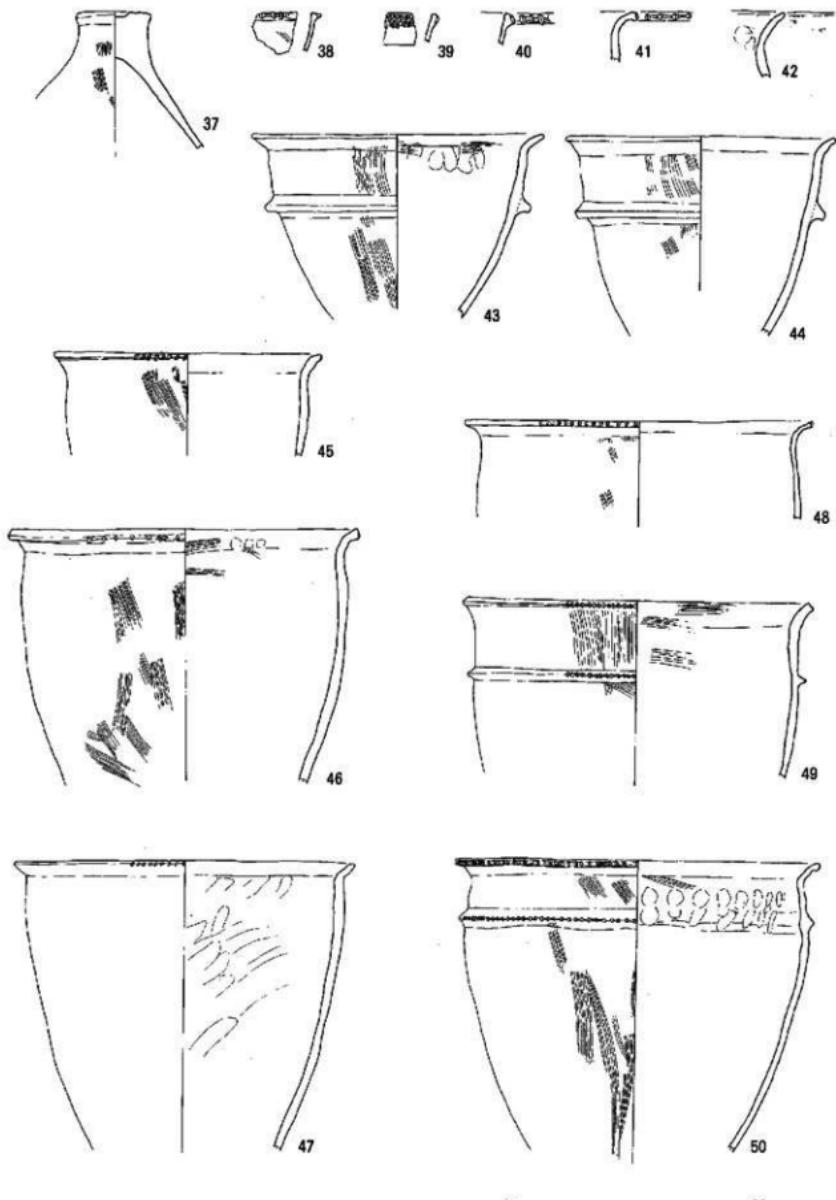


図8 S U328 出土土器実測図2 (1/4)

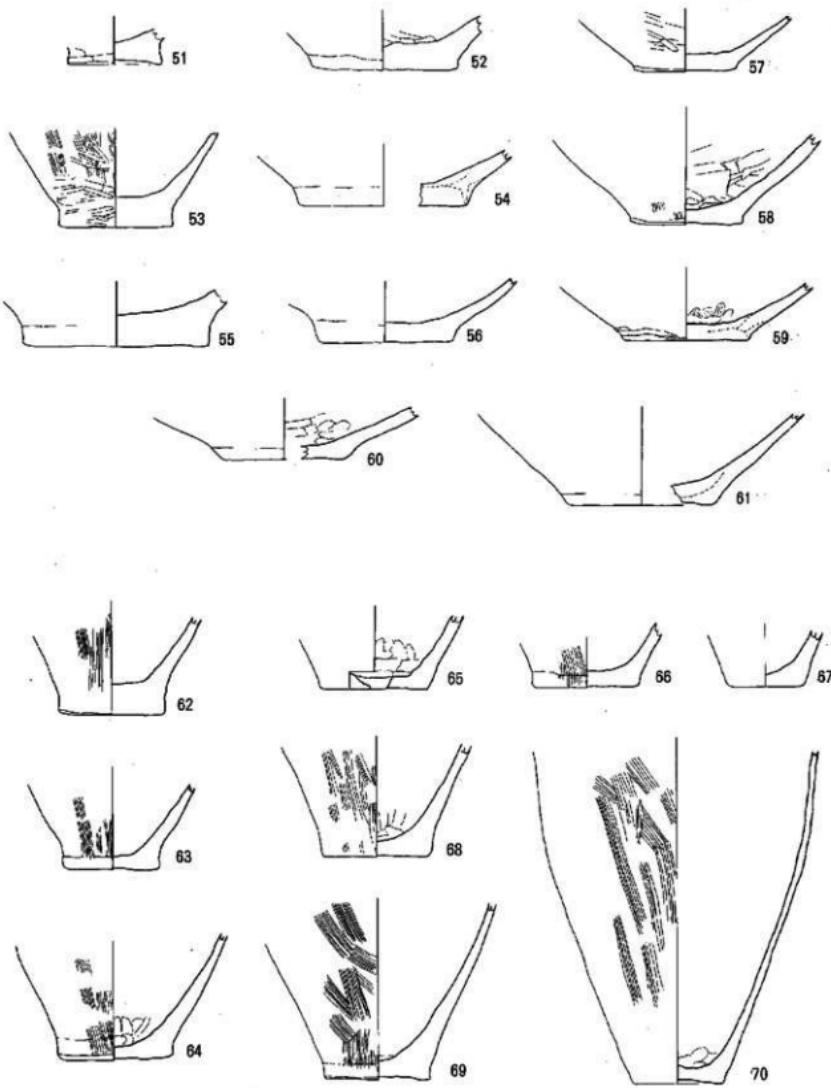


図9 S U328出土土器実測図3 (1/4)

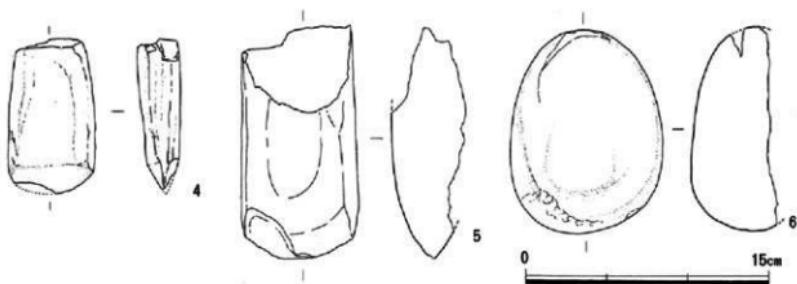


図10 SU328出土石器実測図 (1/3)

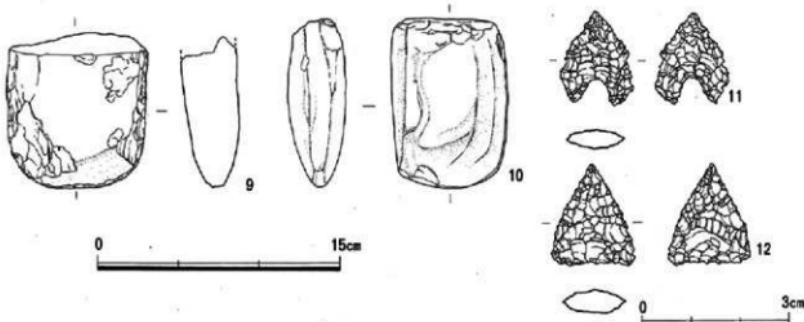


図11 表揮、柱穴出土石器 (1/3, 1/1)

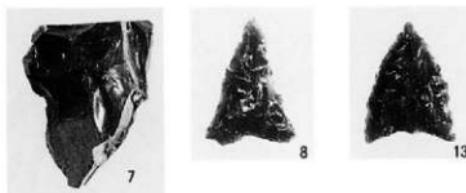


写真1 SU328、柱穴出土石器 (7, 8はSU328; 13は柱穴出土)

出土遺物

土器 (37~70) 24、25は如意口縁、32は甕に近い器形、33、34はくの字に近いカーブの口縁をもつ深鉢タイプである。調整は剥落し不明瞭であるが、31の外面はミガキがみられ、24、30、34の内面はナデを施す。43、44の甕には刻みが無く、梯形に面取した突帯を付す。底部は甕の60、甕の70のように屈曲が弱く薄手のものがみられ、70は上げ底である。出土土器は板付II式の新相までを含むと考えられる。

石器 (4~8) 4~6は玄武岩製で6はわずかに敲打痕が残る。7、8は黒曜石製で7は軸長5.7cmの石核、8は凹基無茎錐で錐身長2.1cm、厚み4.0mm。



写真2 SU328遺物出土状況(東から)



写真3 SU800完掘状況(北から)

SU800

調査区南際で検出され大半が調査区外にあり未掘であるが、径約190cmの円形プランと推定される。深さは40~50cm遺存し、中央に向かって深くなり、不整形に一段下がる。黒褐色粘質土の埋土であったが埋土中に遺物含まず時期は不明である。

表探、柱穴出土石器 9は搅乱、10、11は表探、12、13は柱穴出土。9、10は玄武岩、11~13は黒曜石製。13は凹基で鎌身長2.5cm。

2 壊棺

中央部の調査区際で近接して3基検出された。主軸方位はすべて近似した北東にとる。

ST168

主軸方位N-34°-Eにとり、埋置角度は53°である。削平され、上壺の頭部付近までと下壺の胴部が原位置を保ち、下壺の最大径付近まで、上壺の口縁が覆う。下壺はST171同様、口縁部を打ち欠いていると考えられるが、その部位までは遺存せず不明である。下壺内には20cm以下の石が多く混入していたが、ST171では中世の土鍋とともに出土しているため、この時期以降の開墾により、投入したものと考えられる。検出された掘方下部は略円形プランで、主軸方向の底部側を直に掘り下げ、対向する壁面は斜めに成形し埋置角度をつくる。基底面はこの斜面側に下降し、下壺胴部最大径より狭く胴部が壁面と接地したためか、底部が基底面より浮いた状態となっている。下壺の胴部下位の基底側に穿孔がみられる。

上壺(71)は出土した破片により胴部下位まで復元されるが、小片のため径、傾きに多少誤差が生じている可能性がある。湾曲した胴部上位に2本の沈線、内面の貼付けた口縁端部にへラ状工具によるシャープな刻みを施す。下壺(72)の胴部は上位に3本の沈線を施され、下位には左上りのミガキや板小口状の工具による刷痕がみられ底部付近はハケメを残す。接地する外底部は貼付けと思われる高台が巡る特異な形態をなす。

ST170

主軸方位N-29°-Eにとり、埋置角度は70°である。埋置状態、掘方は前述のST168と類似する。

上壺(73)は器面が剥落し調整は不明であるが、口縁端部に2列の刻み、口縁下と胴部上位に3本の沈線を施す。下壺(74)は胴部上位に2本の沈線を施し、外底部はわずかに上げ底となっている。

ST171

主軸方位N-30°-Eにとり、埋置角度は56°である。掘方は2段掘りとなり、下部の壁面は直立

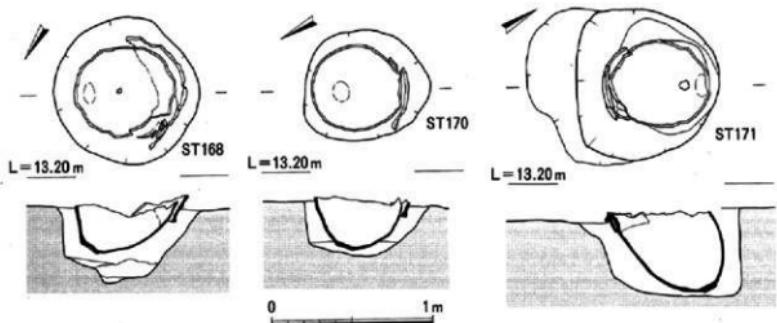


図12 ST168、170、171 実測図 (1/30)



写真4 ST168検出状況（南西から）

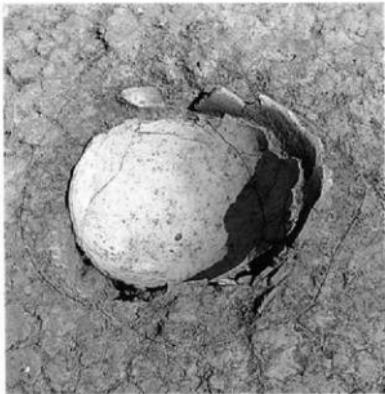


写真5 ST168完掘状況（北西から）

する。基底面は方形に近いプランを呈し下蓋洞部より広く、ほぼ水平の基底面に底部が接する。下蓋の底部近くの基底面側に穿孔を施す。また、下蓋内には前述のST168同様、中世以降の開墾による石が混入していた。

上蓋(75)の口縁端部の貼付けはST169、170に比べ薄く、上段の刻みは浅い。胎土は砂粒を多く含んだ砂質である。下蓋(76)は打ち欠いた部位まで遺存し、洞部下位の最大径部から直線的にやや内傾して立ち上がり上位に断面三角形の刻み突帯を付す。底部は低い段を有した上げ底である。

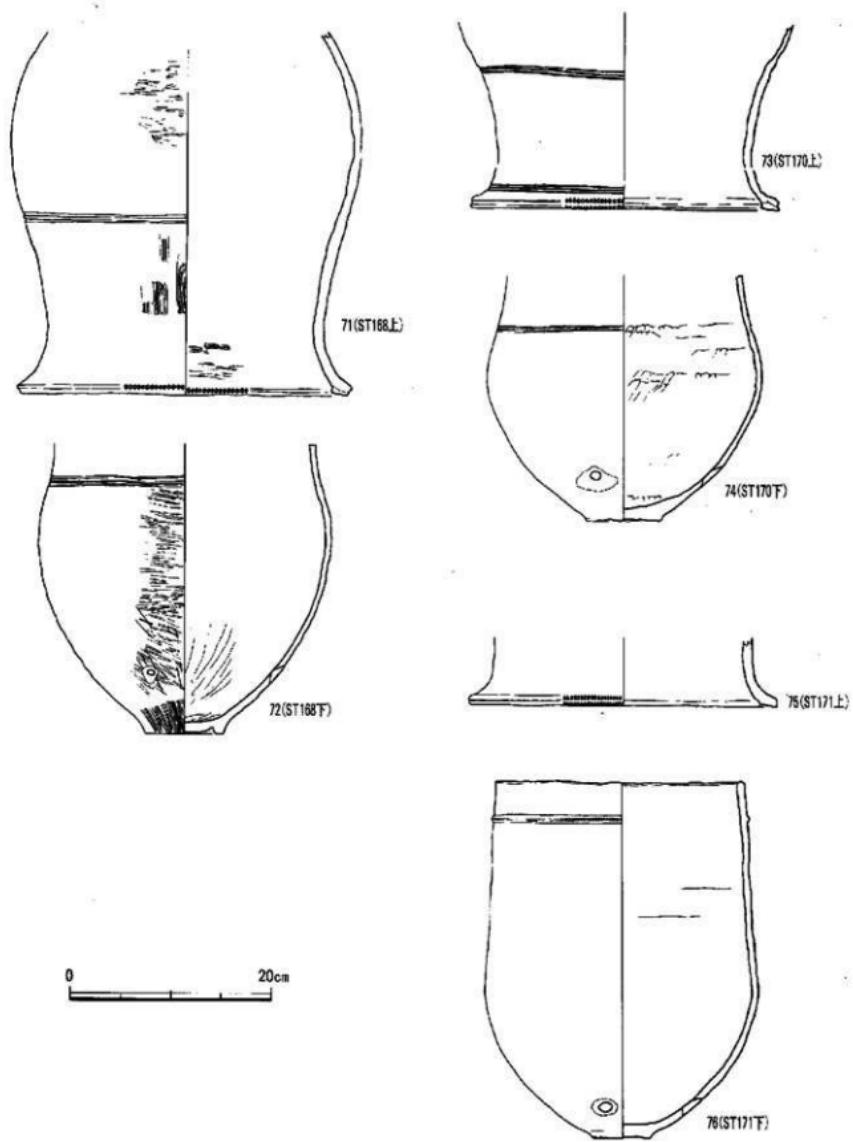


図13 變形実測図 (1/5)



72 (S T168下)



74 (S T170下)



72 底部



76 (S T171下)

写真6 壺棺 (S T168.、170、171)

2. 古代の遺構

SB01

調査区北側で検出され、西側は調査区外へ延長していく東西棟の長舎である。主軸方位はN-22°-E。規模は梁行2間(4.12m)、桁行は9間(18.22m)まで検出された。柱間は心芯で185~213cmまでの幅があるが、概ね210cm(7尺)の設計と考えられる。柱痕は径20cm前後で、掘方の基底面まで認められ、圧痕が残るものが多い。また、柱のほとんどは基底面まで直に痕跡を見出せるが、SP1、20、23では斜行している。SP03、13の柱痕内には石が混入し、空洞化していたと考えられる。

掘方は1m前後の略方形のものが多く、北面では掘方の南北長がほぼ揃い、筋が通るのに対し、南面では、北辺の筋はほぼ通るが、南辺は不揃いでSP12、15、18の南北長が長く突出している。掘方内には柱の回りを掘り下げる段掘りにしたものが多く、柱を内側の掘り込みの端に据え固定させている。内側の掘り込みはSP3、4、15、16のように埋土の下部を切って掘り込まれたものがある。SP11は柱の回りを横端に深く掘り下げ高さを調整したものかと思われ、他の基底面のレベルにも多少幅があるが、横川面のレベルのように、東側へ下降していく状況はみられない。

SB02

調査区東側で検出され、東端をSB01と合わせ直に接する南北棟の長舎である。主軸方位はN-11°-Wをとる。規模は梁行2間(4.04m)、桁行は12間(24.10m)まで検出され、さらに南側の調査区外へ延長していく。柱痕は南側では不明瞭となり、SP13、25、26では断面からも観察できず、SP8は中世の柱穴に切られ、SP09は擾乱を受け検出できなかったが、他の検出された柱痕はSB01と同じく径20cm前後で、掘方の基底面まで確認でき、圧痕が残る。柱間は心芯で195~216cmまでの開きがあるが、概ねSB01同様210cm前後の7尺を測る。

掘方は1m前後の方形プランを呈すが梁間のSP14は一回り小さく、浅い。基底面のレベルは南北方向へほぼ変わらないが、南端のSP26は深く削平され5cm程の遺存である。なお、南側の隣接地は現状で約50cm高いので遺存が良いものと思われる。SP4は削平され下部の柱周辺の掘り込みが遺存し、SP05は内側の黒色土の多い埋土内で柱痕に接し下底よりやや浮いた位置から平石の集積が検出された。上面で柱穴の切り合いは確認できず、他の中世の根石とも異なる形状をなし、SP05に付随した施設の可能性がある。SP10は掘方の際に根石状の平石1個が出土し、その下部より柱痕が検出された。

SA03

SB02の東側に平行する柱列であるが、南北の延長は削平のため不明である。調査区内には対応する柱穴は検出されず、現段階では建物とは判断できない。また、SB02とは近接することや、対応する柱穴がずれていくことから、庇とも考えがたい。一応、柵列として報告する。深さはSP38が約30cm残る他は浅く10cmほどの遺存である。柱痕は不明瞭であるが、径15cm前後のものと考えられる。掘方はSP27、31が深さ5cm程度で形状を留めていないが、柱筋方向に60~90cmの長辺をとる方形プランである。

SB04

調査区の中央西側で検出され、位置と形状から正殿と考えられる。西側は調査区外へ延長していくが、拡張してSP11~13のプランを確認し規模を確定した。なお、調査区外の北西部は現状では芝垣めぐり、G.L. が調査区より50cm程高いため遺構の遺存は良好なものと思われる。

構造は身舎の梁行2間、桁行6間に四面庇を付した建物である。身舎は梁行長4.66m、桁行長13.16mを測り、桁行の柱間は心芯で210~231cmまでの幅があるが、大半は全長を均等配分した219.3cm

と同数値の220cm前後であるのに対し、梁行ではSP 5と6の間が244cmと広くとられている。いずれも長舎の7尺(210cm)より長い柱間である。柱痕は径30~40cmで、掘方の基底まで達していないものがあるが礎板の痕跡は認められない。掘方は深さ30~40cmの遺存で、1辺が1.2~1.4mの大形の方形プランを含むが、その掘方内に灰色がかかった黒色土の多い埋土からなる一回り小さな略方形の埋土が認められた。この埋土のプランはSP 1~4、SP 7~10のように南北のラインが揃ったり、SP 1、2、9、12のように明らかに2つが切り合った形をしたものがある。その成因として1、時期差のある建替えによる柱抜き穴や柱穴掘方が切ったもの、2、柱周辺からの埋め方によって埋土の違いが生じたもの、3、掘方掘削時の掘り込みによって生じたものが考えられた。3は掘削途中での位置の修正や長舎SB01、02でみられた柱回りの掘り込み等を含むものである。身舎の全ての柱穴の基底面には深さの差はあるものの柱痕の周囲を掘り下げた痕跡が認められた。SP03は遺存が悪いため掘方を5cm程下げたレベルで明らかにこの柱回りの掘り込みと考えられる円形に近いプランが検出され、SP10は基底面からは浅い段落ちであるが、柱痕周囲を楕円形に掘り下げた痕跡が見出された。また、SP1~5では基底面からの段落ちの南際に柱を据え、SP6、7では南西際に、SP 8~10では西際に何れも段落ち際の偏った位置に柱が据えられ、柱を固定する意図とともに柱を引き上げる際の方向が示唆される。先の内側の埋土は断面では基底面の段落の肩からの延長で斜めに堆積している。この事から、内側の略方形の埋土は外側の掘方を掘削後、最終的に柱の位置を決め、その周辺を深堀りし埋められたもので、先の2、3の事由によるものと考えた。その場合、外側の掘方埋土がある程度埋まつたレベルから掘り込まれることになる。柱穴の遺存が極めて悪いため、意図的なものか掘り返した土が残っただけの理由によるものか判断がつかないが、基底面に起伏が多いことから粗い掘削が推され意図せず掘方内に土が戻ったものもある。しかしSP2は明らかに埋めた後、切り込んだ掘り込みであり、別個の切り合いによるものである。この場合、柱穴の位置に大幅な修正を行い、掘り直しを行ったものとも考えられる。しかし、いずれの判断も建て替えの可能性を払拭することはできず、むしろ切られた柱痕など確証を得られるものは見いだせなかつたが、切りあつた堀方の位置や形状からほぼ同位置での建て替えとした方が妥当と思われる。

庇の柱穴は遺存が極めて悪く、概して、北面のものに比べ、南面のものは浅く、消滅したものがある。掘方は身舎に比べ小さく、辺長が1m以下である。柱痕は明確なものは無いが、基底に残る痕跡から径20cm程のものと思われる。柱痕が不明瞭なため柱筋が正確ではなく西側が身舎より広がった復元となっているが、桁行の南北両面が身舎から約210cm離れ、梁行では狭くなり、東面側が約180cm、西側のSP13との柱間が約140cm置くものとみられる。従って、庇を加えた建物規模はは梁行長約8.9m、桁行長約16.1mとなる。主軸方位は、N-78°-Eをとる。

出土遺物

SB01~04までの川土遺物は極めて少なく、細片のみ。77は復元口径16.0cmで、高さ4mmの返りが付く。78、79は坏底部で77とともに、築造された時期を最も示す。80は端台で三角形状の透かしがみられる。81は窓口縁部である。83、84、85の外面は直行した浅い木目が残る平行タタキ、内面はナデにより当只の痕跡は消されている。86、87の外表面は木目直行平行タタキ、内面には当具の痕を残す。88は小形の土師器縫口縁である。89の縫口縁陶器細片は胎土が極めて精良で輸入陶器の可能性がある。

SD05

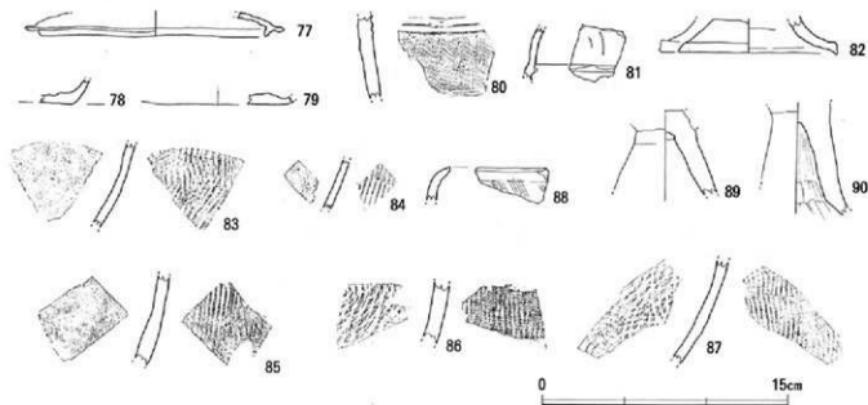
調査区北側で古代建物群と方向を同じくして走行する。北と東側は擾乱により削平されているが東西に延長3.6m検出された。深さは約30cm遺存し、西側は立ち上がり途切れる形状をなす。埋土は黒~暗褐色土で建物群の埋土に類似する。出土遺物は無い。



写真7 S B01~04 全景（南から）



写真8 S B01~04 近景（南から）



出土地点

77 (SB01—12柱廻)、78 (SB01—12柱廻)、79 (SB01—12廻方)、80 (SB01—6)、81 (SB01—7廻方)、82 (SB01—14廻方下部)、83 (SB01—17)、84 (SB04—5内側廻方)、85 (SB01—14廻方上部)、86 (SB01—18廻方)、87 (SB01—12廻方)、88 (SB02—1廻方)、89 (SB04—6内側廻方)、90 (SB02—17廻方)

図14 S B01~04 柱穴出土遺物（1/3）

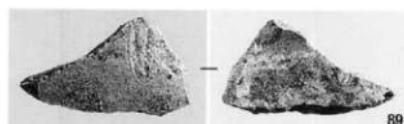
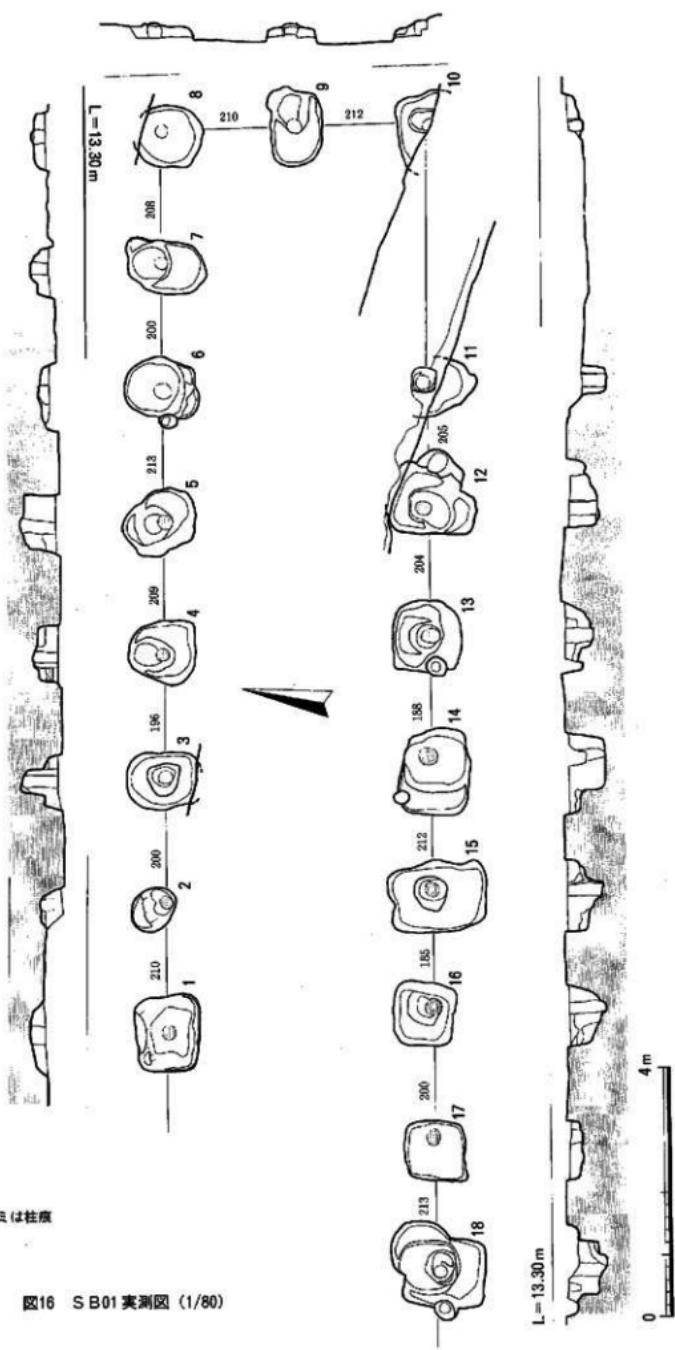


写真9 S B01—9 出土綠釉陶器



図15 S B01—9 出土綠釉陶器実測図（1/3）

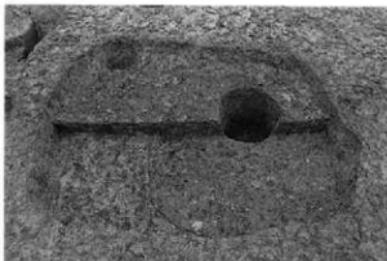


※ アミは柱痕

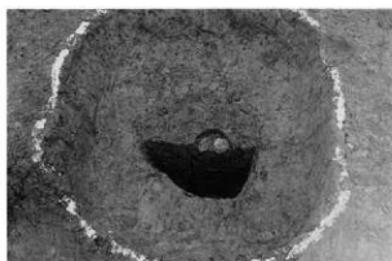
図16 SB01 実測図 (1/80)



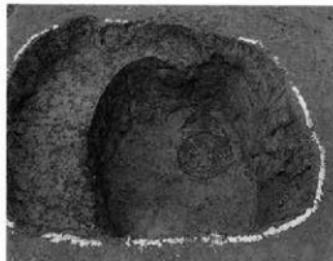
S B01-3 (南から)



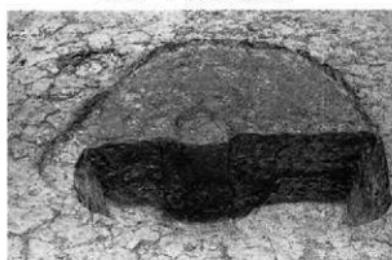
S B01-14 (検出・南から)



S B01-7 (下部・南から)



S B01-14 (完掘・南から)



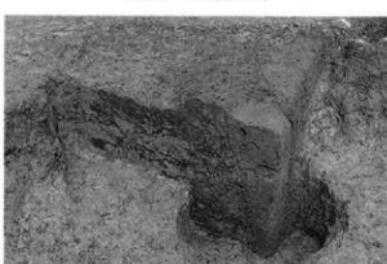
S B01-4 (南から)



S B01-15 (西から)



S B01-12 (南から)



S B01-15 (下部掘込み・南西から)

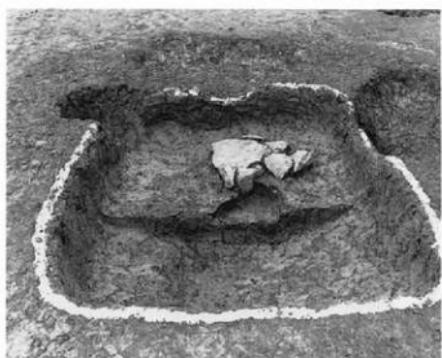
写真10 S B01 柱穴断面



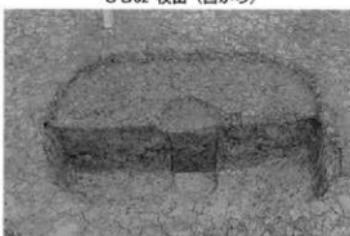
S B02-1 (西から)



S B02 検出 (西から)



S B02-5 (西から)



S B02-22 (西から)



S B02-14 (南から)



S A03-29 (北西から)



S A03-30 (北西から)

写真11 S B02 柱穴断面

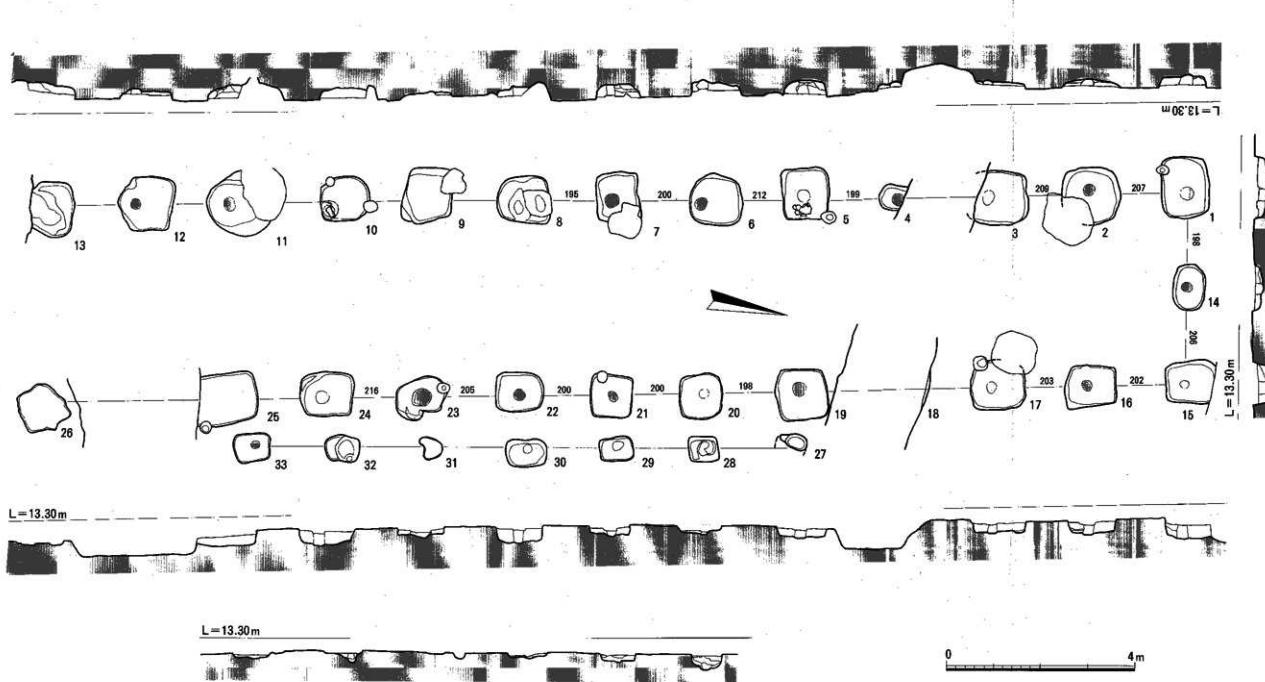


図17 SB02、SA03実測図 (1/80)

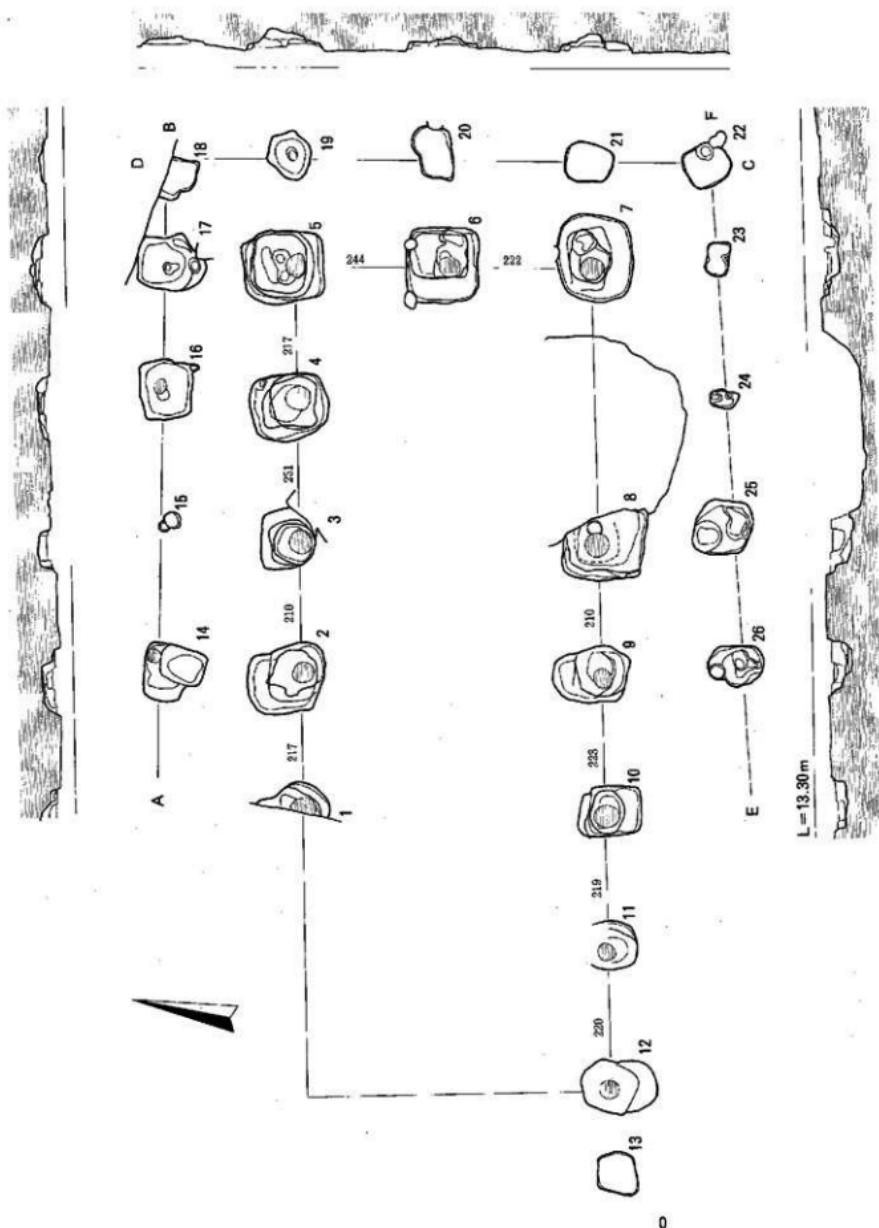


図18 SB04 實測図 (1/80)

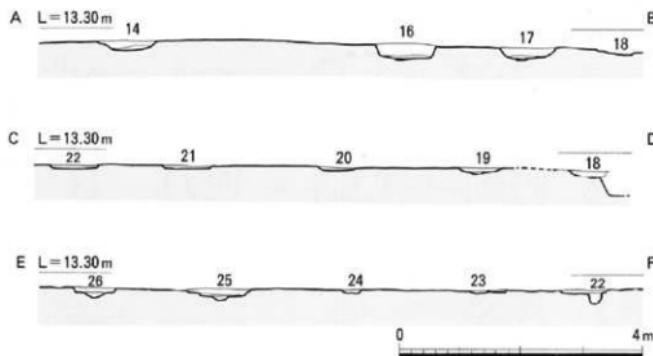


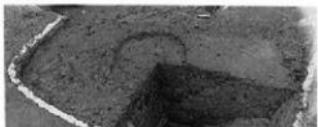
図19 S B04 底断面図 (1/80)



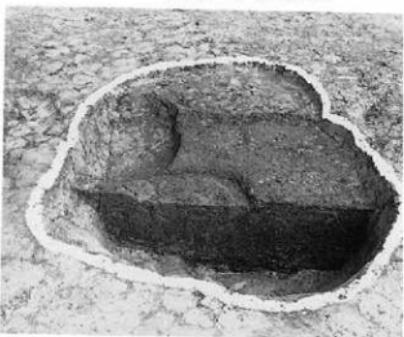
写真12 S B04 検出状況（南から）



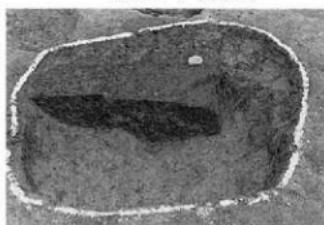
SB04-2 (南から)



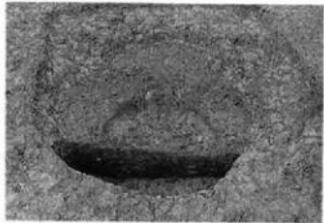
SB04-8 (南西から)



SB04-9 (南から)



SB04-2 (西から)



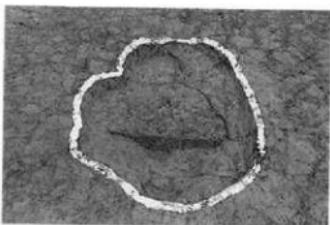
SB04-3 (西から)



SB04-11~13(検出 南西から)



SB04-5 (南から)



SB04-19

写真13 SB04 柱穴断面

3. 中、近世の遺構

検出された中、近世の主な遺構は掘立柱建物跡5棟(SB5~10)、溝(SD01、324)である。その他明褐色埋土の柱穴も多く検出され、基底に根石を設けているものがある。

SB05

梁行は3.8mの長さで間柱が入る可能性があるが、該当する柱穴は検出されなかった。桁行は4間(7.4m)で、西側の柱筋が通らず、全体も歪んでいる。柱間は180~200cmにほぼ収まる。桁行の柱穴は柱筋の方向に長いものが多くSB09、10と似る。南西隅の柱穴には根石を置く。出土遺物は細片のみで詳細な時期不明。

SB06

SB05と棟方向を違え、不明瞭であるが切られているものと思われる。梁行3.6m、桁行5.2mを測る。北辺と東辺に断続的に溝が検出され、その基底は小穴が連続したような起伏がみられ、堅立ちの可能性がある。出土遺物は細片のみで詳細な時期不明。

SB07

調査区の北寄りの中央部で検出された。主軸方位が他の南北棟に比べ西に振れている。2間(3.8m)×3間(6.26m)と思われるが、東辺の柱筋には6個の柱穴が検出され、北辺は重みがあるが、異なった柱筋も考えられる。出土遺物は細片のみで詳細な時期不明。

SB08

調査区北東際でSB09と切り合って検出された。梁行2間(5.54m)、桁行は4間(11.2m)まで確認できるが、北辺は間柱が検出されなかったことや、西辺が調査区外に延長していくため不明である。なお、検出された北東隅の柱穴はSB09の柱筋とも合致するが、柱間からSB08のものと判断した。柱穴掘方が柱筋に長いものが多いことはSB05、09と類似する。出土遺物は細片のみで時期不明。

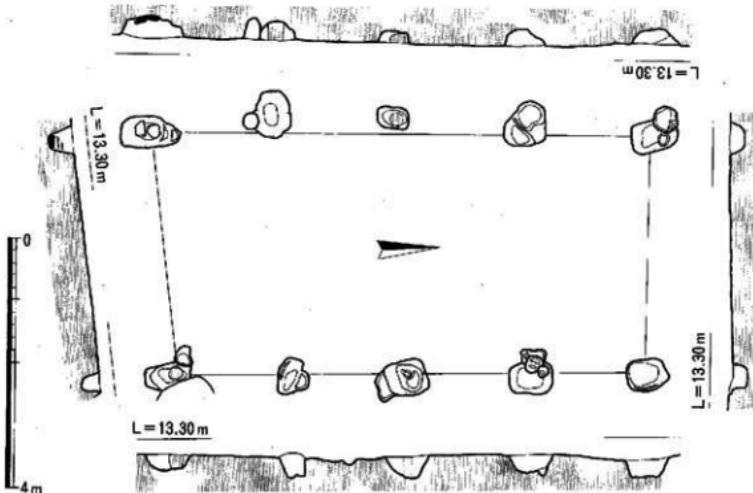


図20 SB05 実測図 (1/80)

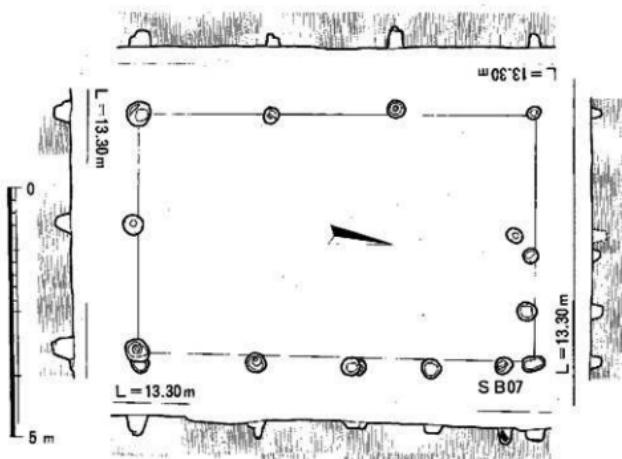
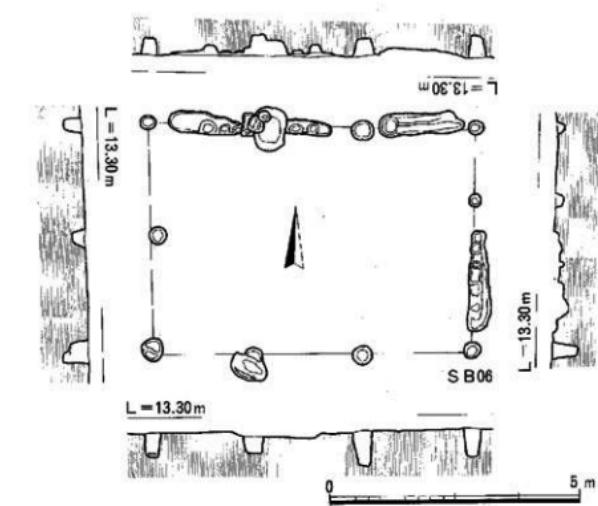


図21 SB06、07実測図(1/80)

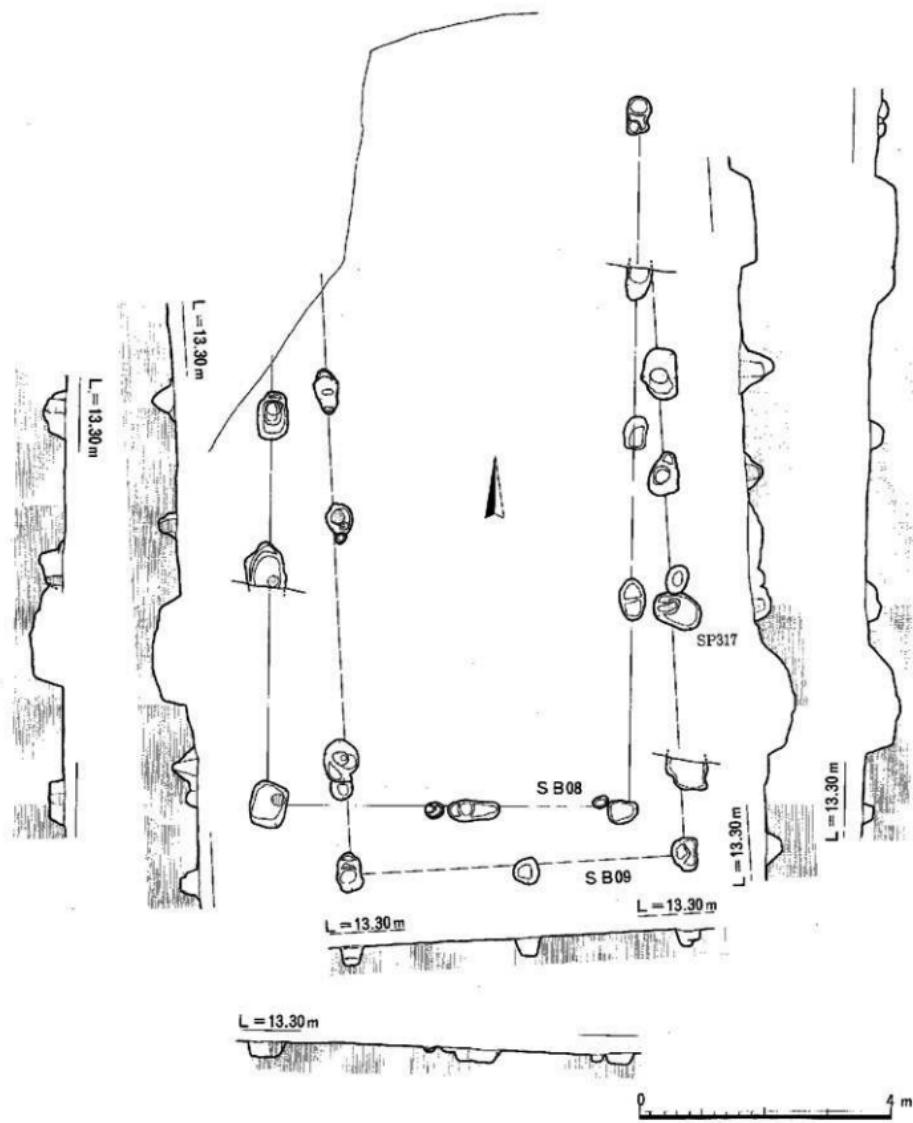


図22 SB08、09実測図 (1/80)

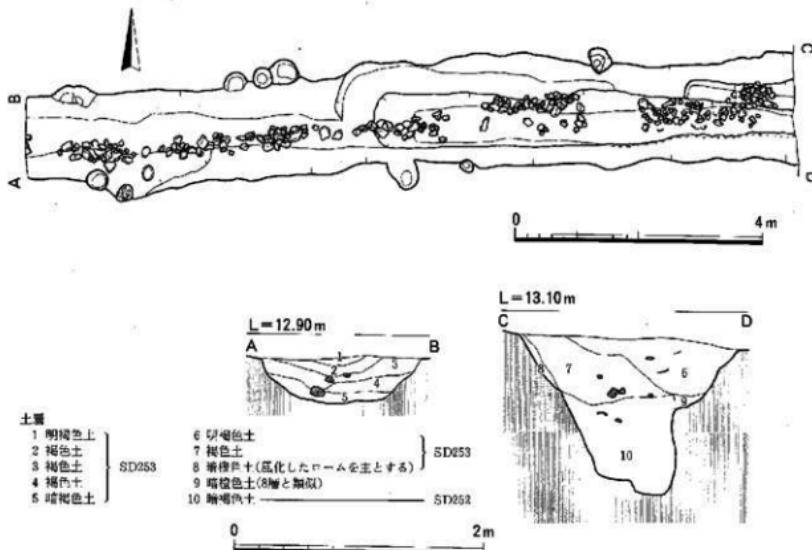


図23 SD252、253 実測図 (1/80, 1/40)

SB09

梁行2間(5.26m)、桁行は7.8mまで確認できるがその延長は不明である。桁行の対応する柱穴がやや、ずれている事はSB08同様である。SP317に焼土や炭がみられた。出土遺物は細片のみで詳細な時期不明。

SD01

調査区北縁で検出された大溝である。上部は擾乱を受け、G.L.から約2m掘り下げる位置(標高11.8m)から灰褐色砂の埋土を検出した。事前に工事掘削が及ぼないことから調査対象から外されていたため検出のみにとどめた。延長方向はN-5°-Eである。出土遺物には近世までの陶磁器や瓦片を含むが詳細な時期は不明である。

SD252、253

SD253は調査区中央部でN-3°-Eに走行し、SD01の方向と近似する。東側の延長は隣地境界に沿っている。検出された東西に走行するほぼ中央で上端が北にわずかに振れて、同位置から基底面が30cm段落ちし、北側にテラスを有した2段掘りがみられた。形状や出土遺物の時期から東半の下部には時期差のある溝が重複しているものと考えSD252とした。SD252の北側テラスは東側へ狭まりながら低くなり、調査区縁では基底近くの段落ちとなる。SD252は西側には延長せず、陸橋が設けられていた可能性があり、その後、SD252の下部が埋まり(10層の準層であるため埋め立てられた可能性がある)、陸橋部分も掘削しSD253を築いたものと考える。SD253の掘削は東壁断面で下部のSD252の立ち上がりを切ることから抜転したものであろう。SD253は西側に浅くなっていくが、さらに延長は試掘により北側へ迂曲するものと考えられる。SD253の中央部の3~5層に堆積した疊に混じって近代以降の陶磁器が多く出土した。また、上層の検出面ではSD253の南寄りに迷なって疊が出土し、東



S D01 (西から)



S D253 碓出土状況 (西から)



S D252, 253 完壊状況 (西から)



S D253 出土遺物



S D252 東壁土層 (西から)



S D252 出土遺物

写真14 S D01、S D252、253とその出土遺物

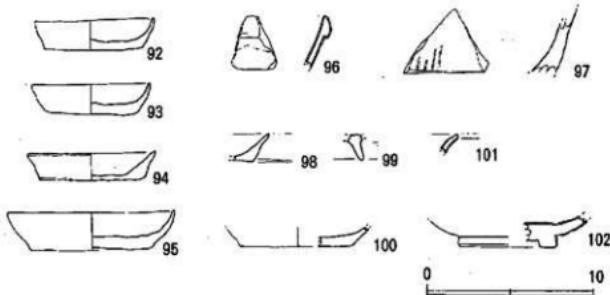


図24 SD252 出土遺物、その他柱穴出土遺物 (1/3)

壁面の6層に近い形状で埋没するまで存続していたと思われる。

出土遺物

SD253からは近代以降と思われる型紙による絵付けの磁器や高取焼、摺鉢を含む陶磁器類が上述の礫に混じって多く出土した。SD252からは段落ちした部分から同法量の土師皿が20枚以上完形に近い形で出土した。92~95はこの一部である。土師皿は径7.1~7.6cm、壺95は口徑10.0cmを測る。その外、青磁、備前摺鉢、高取焼、トチンなどを含む。

その他柱穴出土遺物

復元した掘立柱建物の柱穴から時期が判断できる遺物は皆無に等しく、ここでは大略の時期が判る他の柱穴出土遺物をあげる。96、97は同じ柱穴から出土し、96は玉縁白磁、97は瓦質の摺鉢である。98、99は同柱穴から出土。98は上師皿、99は土師器の高台である。100は底径6.5cmを測る土師皿、101は口禿げの口縁、102はSB09のSP317から出土した青磁碗である。

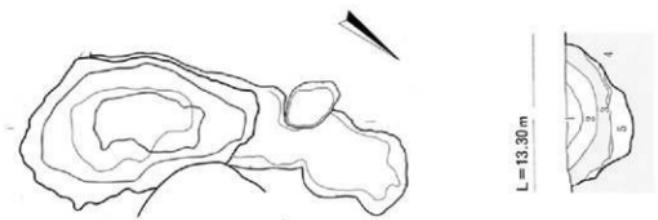
4. その他の造構

SX382

調査区東寄りの中央部検出された。中世のSB06に切られ、北東辺のSB02柱穴との切り合は不明確であるが、柱穴掘方によって粘土が押され切られたようなプランを呈している。しかし、上部の埋土は明褐色砂で、他の中世の埋土に類似する。長軸方位をN-38°-Wにとる直角楕円形プランを呈し、最下部に暗褐色粘質土を充填した上に全面約10cmの厚さで灰白色粘土を貼る。粘土より上位ではレンズ状の堆積がみられ、最上層に明褐色砂が堆積する。基底面までの深さは52cmを測る。南側に近似した砂土の埋土からなる幅約70cmで凸凹のあるプランの溝状造構が取り付く一部粘土の周囲に巻いていた。深さは浅く10cm程度である。砂土が上部に堆積することや粘土を貼っていることから水を溜めたものとも考えられるが性格は不明である。埋土中からは弥生土器細片が少量出土した。

SK183

調査区中央部東寄りで検出された。甕棺と近接し、主軸方位も近似する。埋土の黒褐色土からも弥生時代の可能性が高い。長軸長115cm、短軸長55cm、深さ10cmを測る。基底面はほぼ平坦で小口の掘り込み等はみられない。出土遺物は弥生土器の細片が2点のみである。



アミ雄は極方下端



図25 SX382 実測図 (1/40)

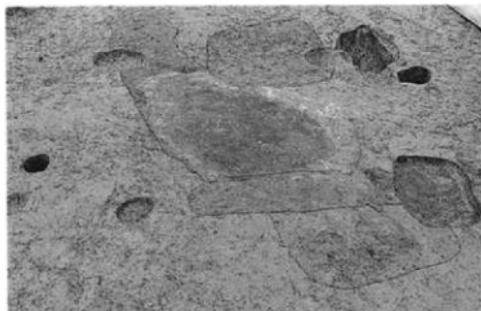


写真15 S X 382 検出状況（南から）



写真16 S×382 粘土
露呈状況(南西から)

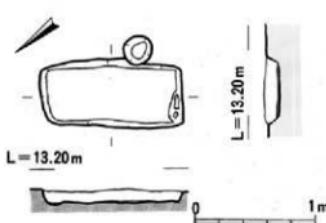


図26 SK 183 実測図 (1/40)



写真17 SK 183 実掘状況 (北西から)

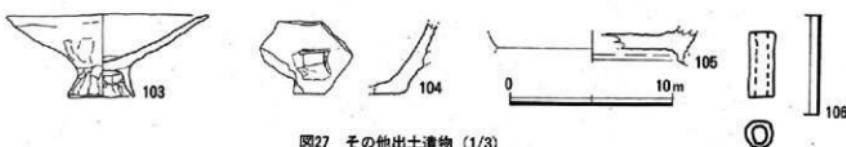


図27 その他出土遺物 (1/3)

5. その他の出土遺物

103は弥生時代の遺構にみられる黒褐色埋土の柱穴から出土した。ナデ押さえによって製塙土器に類似した小さな脚部に口径12.3cmの大きく開く坏部を接合する。口縁端部はヨコナデによりわずかに外反する。全体に2次火熱を受け赤変している。104は取手を欠損した須恵器で柱穴から出土した。105は近代以降の溝であるSD253から出土した須恵器である。内面は底部と体部の境を粗くナデ付けている。底部が平坦で雑な調整を施し臺等の底部とも思われる。106は古代のSB02柱穴から出土した碧玉製管玉である。

6. 調査区南半部

調査区南側は特に削平が著しく、予想された郡庁の南門は検出されなかった。近、現代の土壤が多く、検出された遺構は中世以降の柱穴、前述の弥生前期の貯蔵穴、時期不明のSD399、SK391などである。

SD399

南に湾曲しながら走行する。浅く深さ8cm程である。褐色砂質土の埋土で出土遺物は弥生土器の細片が1点のみ。

SK391

長軸長104cm、短軸長74cmの長方形プランを呈し、主軸はほぼ座標北である。深さ36cmで埋土はロームブロックを多く含む褐色～黒褐色土。出土遺物は無い。



写真18 柱穴出土遺物



写真19 調査区南半 (北から)

IV. まとめ

1 郡庁の構造と規模

外郭施設は不明確であるが、北側のSD05と東側のSA03が可能性がある遺構としてあげられる。北側は近世の大溝と現代のぶどう畠造成による擾乱を受け、東側は耕作土を埋土とした段落ちがみられ、隣接地との境界は切り落とされていることから、現状の地形は近世以降に大きな改変を受けてると考えられる。とくに調査区南部は削平が著しいため遺構が消滅している可能性が高く、残念ながら今回は郡庁の形態を明確にすることはできなかった。

検出された郡庁建物の配置形態は梁間2間の長舎を巡らした空間内に2×6間の身舎に四面庇が付属する正殿を配したものである。対称形を想定した場合、正殿の中心から折り返した東西棟SB01の桁行は40.2m（19ないし20間）に推定することができる。南北については復元する証跡が無いが、外郭施設を含め半町域内におさまる程度の規模と思われる。構築時期は北部九州の須恵器編年でいうVII期（近年、実年代に動搖がみられるが從前7世紀後半に比定）以降と考えられ、正殿に建替えの可能性があるものの個別説明で記したように遺存する掘方からは、確証は得ていない。

2 早良郡衙の規模と構造

第2章で述べたように原3次からの延長で有田3次に幅6mの大溝（仮称SD01。以下、遺構名は図26に付した仮称である）が検出され、北側に18m隔てた対面にも同様の大溝SD02が確認された。埋没時期は10世紀まで降る。両溝間に官道が推定され、この方向は条理と合致している。このSD1、2は結果的に丘陵を南北に大きく分断することになり、水利等の機能の他大区画としての機能も持ち得ていたとも考えられる。郡衙域全体を区画する施設は現在までに検出されておらず、周辺の沖積地より10m以上の比高差をもった独立丘陵の地形的な特長がこの役割を持ち得るとも考えられる。この人溝から発して直交した幅1m程の溝SD03が南側へ走行する。地形的には谷落ち際に沿って南側の頂部に向かい、台地中央部を東西に分断する。この延長は本調査で検出されたSB01の東端に達することになり、これに沿って官道から郡庁へ至る道路の存在が想像されるが、遺構は確認されていない。南側延長に近接した187次で方向が異なるものの形態が類似した溝が検出され、浸食した谷地形の制約を受け東側に振れたものとも考えられるが、方位を異にした区画溝の可能性もあり、現段階では何れとも判断できない。SD03の西側に約107m（1町）離れ平行するSD4が掘削されている。このSD03とSD04に挟まれた標高13mのセンター内には最も広域の平坦面が求められ、地形を配慮した計画設計が示唆される。SD04に近接して方向を異にしたSD5が検出され、南北に110m以上の延長が推定される。何れも区画溝と考えられ、SD05と6、SD7と8が直交し、一連のもので方形に閉む可能性は高いが、その場合、平面形に歪みが生じることになる。前述の様に一帯には平坦面が広がっているが、北西部は谷があり込むため地形的な影響を受けたことが考えられるが、周辺の溝や建物群の方向性は精度が高く、郡衙域内の整備が進行、改変していく中で小区域が繰り足されていった結果の歪みともみれる。

このような区画溝内に配置された建物群も主軸方位から分類することに区画溝との対応が可能である。まず、1中央部を分断したSD03によって、東側に南北棟の側柱建物、西側に総柱建物がみられるよう施設機能による区分がされる。東側の側柱建物は丘陵際の132次（未報告）まで検出されている。調査例が未だ少なく、具体的な時期変遷を追うことはできないが、66次、87次で検出された側柱建物は同規模のものが軒方向を同じくして整然と配置されている。

西側の総柱建物には第2章で述べた3重の支柱による構列で拘まれた総柱建物群を含め大略4時期に分類されている。⁽¹⁾その内、後半の2時期が本調査の遺構と時期的に近く、以下これに絞って説明す

る。先ず、本調査の郡庁と方位を同じくするSD4に沿って溝から13.0m（40尺）の間を置き、棟方向と同じくした3×4間の総柱建物が並列する。この建物間も北辺では13.0mの間隔が確認され、企画性が認められる。同位置での建替えがみられるものがあり、小期に細分される可能性がある。また、内側には主軸方位が近似する布掘総柱建物や側柱建物も検出されているが、未調査区が広く、構成は不明確である。次期になると総柱建物にかわって大型の側柱建物がSD6、7に沿って配置されるようになる。時期を8世紀中頃までにおさえる意見があるが、詳細は報告書に委ねるが、82次で検出された2×9間の大型建物や77次で検出されたSD7と平行する11世紀の方形溝と重なった側柱建物の時期には再考の余地があるように思える。

郡衙域としてはSD2の北側でも大型掘立柱建物は検出され、丘陵のほぼ全域に可能性をもつが中核施設はSD1の南側から今回の調査地点までの南北330m（3町）、東西はSD5から132次（平安の大型側柱建物跡を検出している）までの330m以上が想定される。

3 文献から

官道の問題を含め、文献からの考察は既に日野氏によって詳細にまとめられている。⁽²⁾『和名抄』による早良郡は7郷を含む下郡にあたる。その中、田部郷の遺称地である小田部が有田遺跡群の北側（SD 2以北）に位置している。『草薙造文』観世音寺坂碑帳の天平宝字二年（758）に主帳外小初位上平群部 摂大領下從七位下三宅連黄金 摂少領無位早良勝弟子の記載があり、さらに『日本紀略』延喜十六年（916）に筑前国早良郡司三宅春則の名が記され、日野氏は郡司が三宅氏の譜第であった可能性を指摘するとともに、天平宝字二年の「早良郡新田郷人夫戸上三家連息嶋戸口三家連豊繼昭申稻代物進奴婢等事」から三家連の一族が額田（遺称地 野方）に平群、早良はともに『和名抄』から郷名の存在が知られ、遺称地である戸切、祖原に居を構えていたものと考えられている。7世紀代有力者の居宅としてII（P-2、3）で記した生松台遺跡があげられ、8～10世紀の郡司を含む有力者層の居宅ないし官衙の可能性もふくめた遺構が検出されたものに野芥遺跡群第4次、柏原遺跡、東入部9次調査がある。何れも周囲の丘陵際に立地し有田遺跡が早良平野の中央に在って求心的な立地を示している。

要約すると以下のとおりである。

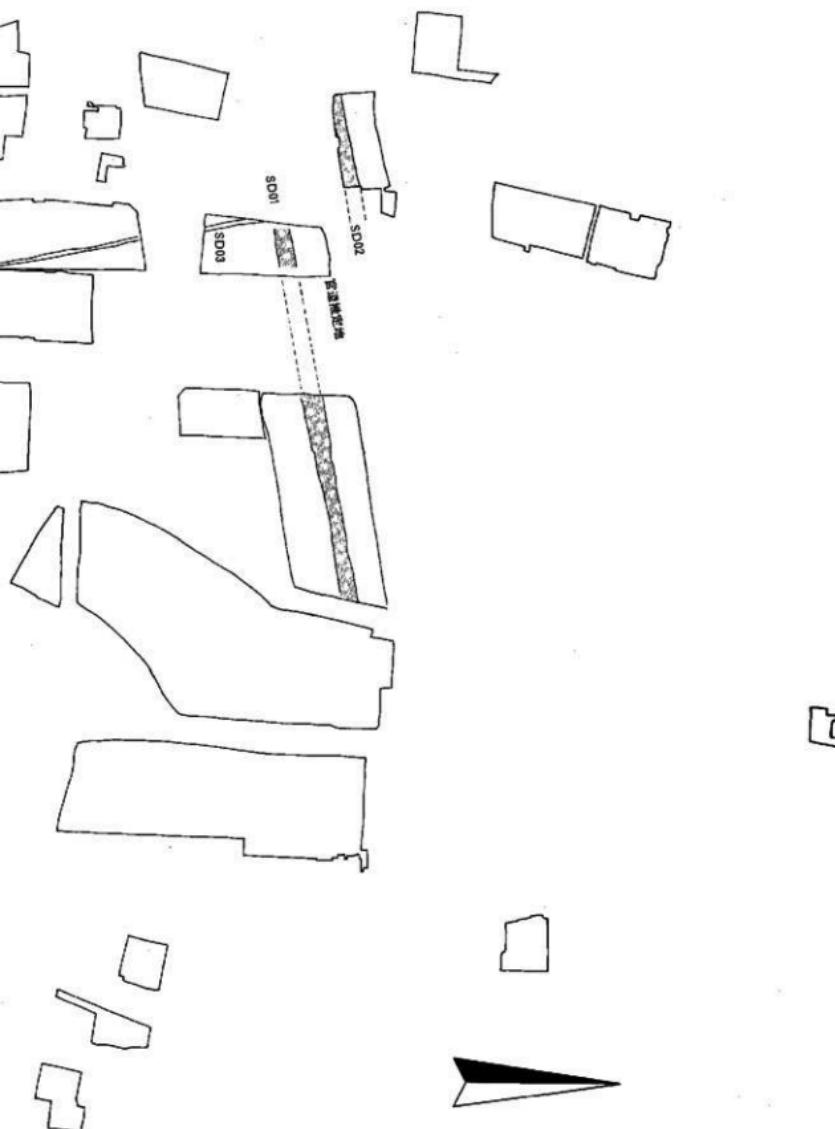
1. 今回、検出された郡庁の創建時期は北部九州須恵器編年VI期（7世紀後半）以降で、既往の同時期と考えられる遺構から下限は8世紀前半までにおさまると考えられる。建替えは正殿にその可能性があるものの、遺存が悪く確認は得られなかった。
2. 現在までに判明している郡衙の構造を想定すると官道を境に大区画が設けられ、さらに溝によって小区画した中に、正倉、館などの機能に応じた施設を配置している。郡衙域全体の規模は不明であるが、中枢をなす範囲は現在までに南北330m（3町）、東西330m以上が予測される。
3. 有田遺跡群において、前代の「官家」に関連した倉庫群から継承され律令制度の中で再編成され完備される郡衙は北部九州須恵器編年VI期（7世紀後半）以降で、現段階までに正倉で大きく2時期の変遷がみられる。郡衙としての存続時期は明確ではないが、関連した施設としての機能はSD1の埋没した10世紀前半頃までには衰退していたものと思われる。この変遷時期は周辺の官衙ないし、居宅の可能性をもった柏原遺跡や德永遺跡と近い。

（1）米倉秀紀「早良郡衙」—福岡市有田遺跡における官衙状遺物群。「先史学・考古学論文」1991
「有田・小田部31」福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 1998

（2）日野尚志「牟多田遺跡」福岡市埋蔵文化財報告書第27集 1974
「筑前國の御家について」佐賀大学教育学部論文集 第35集 第1号 1987など



図28 宮衙関連遺構図（1/1,500）



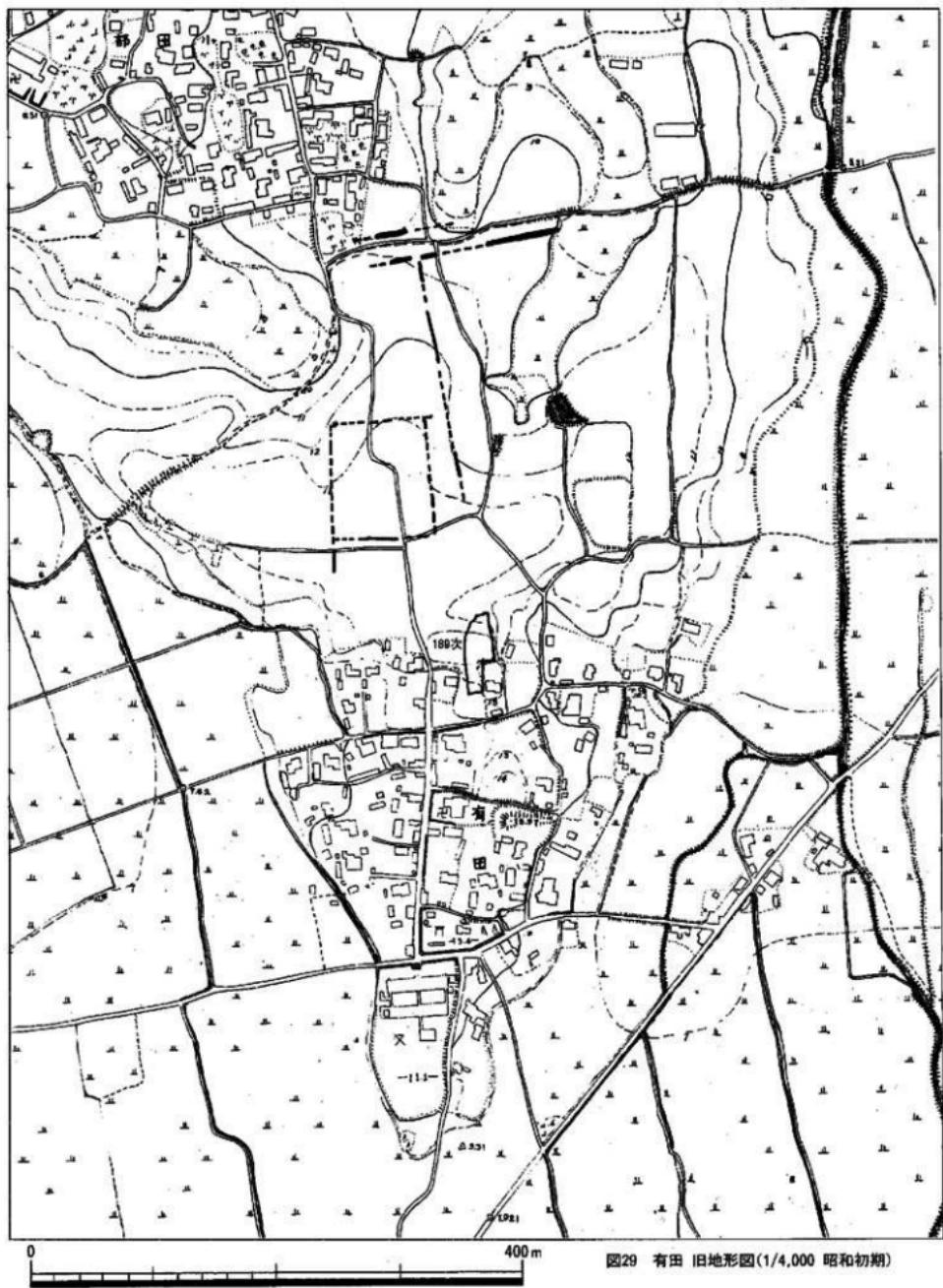


図29 有田 旧地形図(1/4,000 昭和初期)

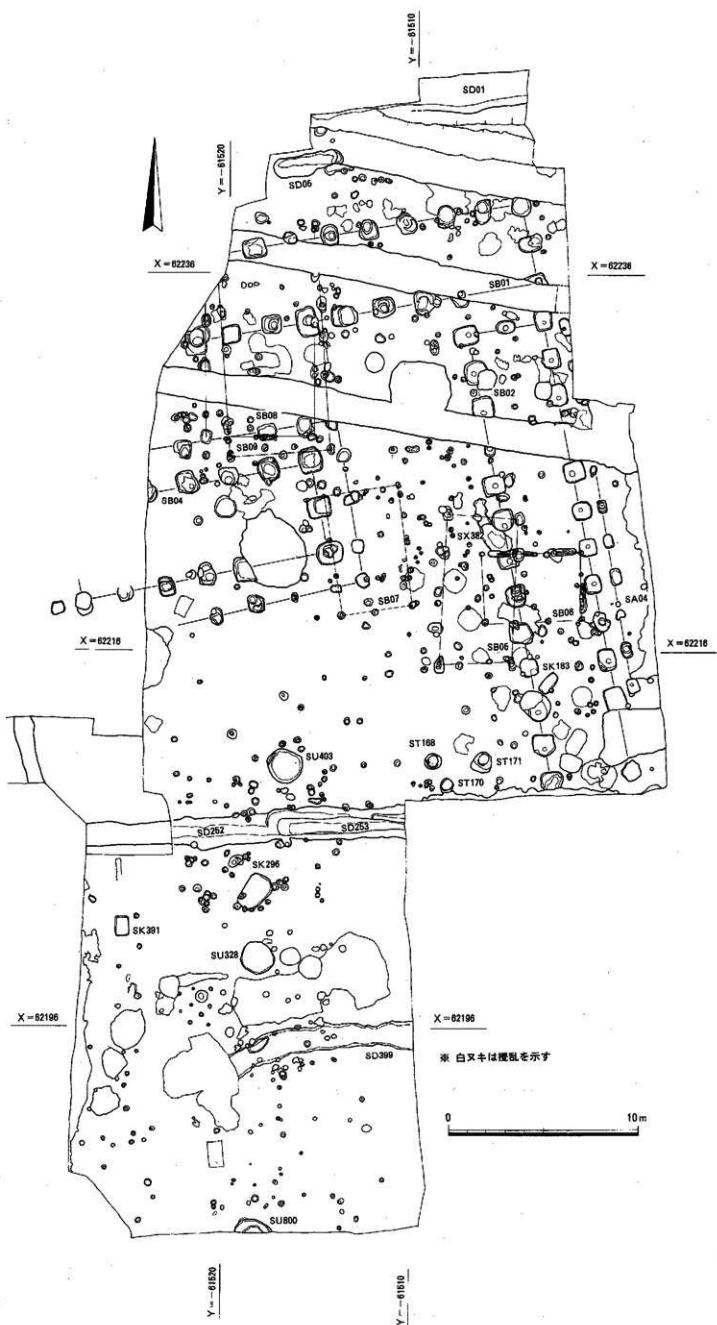
有田・小田部 33

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第649集

2000年3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8-1
☎092-711-4667

印 刷 松古堂印刷株式会社
福岡市西区周船寺1丁目7-64
☎092-806-1661



付図 有田遺跡群第189次遺構配置図(1/200) 「有田・小田部33」福岡市埋蔵文化財調査報告書第649集